

影の深さ。国家という文脈も抱え込んでい
るのか。山下作、菊酒ならぬたんぼ酒に
は可笑しみがあるが「首」が不吉な翳りを
一首に与えている。佐佐木作はトビウオへ
の挽歌か。結句がやさしい。大塚作、水を
なくした水たまりの発見。眼がいい。

大月閑

- ・想ふまじ君想ふまじはつ夏をあふひの祭
りも過ぎたるころか 河野 洋子
 - ・迎へ火にかすかな權の音のしてたらちね
の母もう来る気配 由田 欣一
 - ・隠れんぼ一人二人とぬなくなり暮れて母
待つ子のまあだだよ 岩本多美枝
 - ・おやすみと言つて別れたタクシーの乗り
場に思慕の雪降りつもる 山口 明子
 - ・あぢさゐのあをより始まる青海波夏へ夏
へとひろがりてゆく 永田 千奈
- 改めて一年間の心の花を通読すると、季
節の移ろいを感じることができ。時事、
訃報、生誕：さまざまなこと思ひ出す短歌
かな。河野作「あふひ」に「逢う日」と「葵」
を重ね、イメーヅが膨らむ。由田作、「迎え
火に「かすかな權の音」を聞いた母への思

い。岩本作、どことなく怖く、懐かしい。
山口作、「思慕の雪」の表現の妙。永田作、
初句と結句の平仮名が効果的で、あじさい
から青海波へ青でつながっているのも良い。

佐佐木頼綱

- ・はじめから決めてたような冬の朝 子供
となつて母は逝きたり 上原 良美
 - ・ぐるぐると黒きマフラー巻き直し駅へと
急ぐ通夜まで十分 加利川友子
 - ・六年を経れば法事に華やぎも少し加はる
母の命日 上野 順子
 - ・冴えかへる霜の朝の七十路のいのちいよ
よ深くなりたり 海沼志那子
 - ・慣れぬ手でベビシートを取り付ける時
間暮らし変化を思う 木村 俊介
- 今年が印をつけた歌を見返して分類をし
てみる。旅の歌、犬猫の歌、飲食の歌、生
活の滋味のある歌、枕詞や数詞や外来語が
面白い歌、叙景歌、挽歌：
昨年より歌の幅が広がって、自
分の歌の理解が幾分広がったのではないか
という気もする。しかし五首に選ぶと
と相変わらず命の歌を選んでしまう。正直

さ、切実さが迫ってきて胸を打つ。

海老原愛

- ・海原に針のごとくに雨刺せば底ひの魚も
雨宿りせむ 野見山尚之
 - ・空つぽをひとつずつ持つ樂しさを重ねて
帽子売り場の帽子 大谷ゆかり
 - ・花の散るさびしさを知る人間が散らない
花を造るさびしさ 大塚 亜希
 - ・もし僕がいなかったなら爆発でできた宇
宙は存在しない 宮田 修
 - ・夜のバスの窓側の席高みより信号待ちの
キスを見ており 塚本 瑞江
- 引力のような力でグツと惹きつけられた
歌から選んだ。野見山作、海の中にいる魚
も雨宿りをするという表現のすごさ。大谷
作、帽子の凹みを空つぽを持つと表現し、
さらにそれを楽しいと感じる作者の感性の
豊かさに驚いた。大塚作、真理をズバリ言
い当てられたという感じ。わかりやすく深
い歌。宮田作、スケールの大きさが心地良
い。塚本作、作者の視線とその動きが目に
見えるようだった。